

# わらべ歌「あんたがたどこさ」の発祥を巡る考察

山 本 清 洋

A Study on Original Area of Japanese Traditional  
Folk - Game Song ANTAGATADOKOSA

Kiyohiro yamamoto

豊岡短期大学 論集

第 16 号 別 冊

令和 2 年 3 月 31 日 発 行

## わらべ歌「あんたがたどこさ」の発祥を巡る考察

A Study on Original Area of Japanese Traditional  
Folk - Game Song ANTAGATADOKOSA

山本 清洋

Kiyohiro Yamamoto

### 序 論

岡村一郎は、「あんたがたどこさ」の発祥を熊本としながら、「川越の子供たちが仙波だと考えたって別に差支えがあるわけではなし、あながち幼い者たちの夢をこわす必要はない」と述べている<sup>1)</sup>。また、町田と浅野は、奈良時代から今日の伝承童謡に至る歴史を多くの文献をもとに概説するなかで、「我が国の『わらべうた』は、その大多数がかなり古い時代から民間の子供たちに伝承されてきた唄で、作られた年代も中心地域もはっきりしないものが多い。むろん作者などは分からな<sup>2)</sup>」（町田、浅野編 279頁 1962）とする。上述した言説を認めたうえで、本論で、「あんたがたどこさ」の発祥を考察するにあたっては、次の理由がある。

①「あんたがたどこさ」は、元来、手毬つきの歌として生まれ親しまれてきた。しかし、1980年以降、子どもの伝承遊びの衰退に伴い、この歌は子どもの世界からほとんど消えてしまった。ただ、1992年に発足した「日本のお手玉の会」の2002年「第11回全国お手玉遊び熊本大会」で「あんたがたどこさ」が採用されたのを機に、「あんたがたどこさ」は手毬うたからお手玉遊びの歌として全国のお手玉愛好者に親しまれている<sup>3)</sup>。

さて、「あんたがたどこさ」の発祥地が熊本であるという説があるのは、このわらべ歌の歌詞からして自然な推察である。ところが、発祥地は、熊本ではなく川越や東京地方であるとする文献がある。

②「あながち幼い者たちの夢をこわす必要はない」であろう。しかし、川越説の根拠、熊本説の根拠共に、史実や史的資料に欠けるところがある。幼い者たちの夢を壊す思いはないが、その発祥地の根拠を明らかにすることは、子どもらの遊びの世界を豊かに彩ることになる。さらに、そのわらべ歌を子どもらに伝えることは、子どもの夢にさらなる彩を与えることになる。

③発祥地、作者、作曲者も明らかでないが、日本に綿々として伝えられてきたわらべ歌に関する既存の研究で、自明の理として存在する〈わらべ歌は子どもの世界で自然発生的に生まれた〉とい

う言説に疑問を持つ。伝承童歌の歌詞、曲は子どもらが口ずさむ音を大人が歌として作ったものではないのか。この点が、解明されると、発祥地を限定することが可能になる。

## 目的と方法

日本のわらべ歌全集全 34 巻および「あんたがたどこさ」に関する既刊書および発祥時期に関連する文献をもとに論拠を探り、発祥の地とされる熊本市と川越市で以下の調査を実施した。

①川越市の調査 期 間：平成 30 年 8 月の 1 週間、

調査対象：仙波山周辺の高齢者 10 名。川越市立中央図書館、  
川越歴史博物館、

調査内容：「あんたがたどこさ」の発祥地

②熊本市の調査 期 間：平成 29 年～令和元年の約 30 日間、

調査対象：「あんたがたどこさ」顕彰会、細川藩文庫  
「あんたがたどこさ」の舞台とされる市街地  
調査内容：熊本起源であるとされる根拠

## 「あんたがたどこさ」の舞台と発祥に関する所説

### 日本わらべ歌全集に見る見解

「日本わらべ歌全集」全 34 巻のうち、「あんたがたどこさ」を採集しているのは 23 巻である。その中で「あんたがたどこさ」の発祥ないし発生を推察できるものは以下の 12 巻である<sup>4)</sup>。

- 1 「歌の舞台は熊本であるが、その発生は東京と考えられる。」(25 巻 85 頁)
- 2 「この歌の舞台が熊本であることは、歌詞から見て明らかであるが、肥後の表現に『さ』をつけるものがなく、東京からうたい広まっていったものと考えられている。明治時代に東京でうたわれた悪口歌『あの子どこの子 提灯屋の継子・・・』をルーツとしている。」(18 巻下 68～69 頁、22 巻 42 頁 \*小原昭夫氏)
- 3 「全国的にうたわれているが、比較的新しい歌と考えられている。また、歌の舞台は熊本であるが、歌いだされたのは東京であるという。」(14 巻上 68 頁)
- 4 「歌の舞台は明らかに肥後熊本であるが、熊本には『・・・さ』という用法はなく、東京がおこりであるといわれている。」(10 巻下 54 頁)
- 5 「昭和に入ってから比較的新しい手まり歌で、全国的に流布している「あんたがたどこさ」とともに、明治時代東京でうたわれた悪口歌「あの子どこの子 提灯屋の継子・・・」の発想から生まれたとも考えられる。」(11 巻 79 頁 \*日本のわらべ歌 小原昭夫氏)

- 6 「浅野健二博士によれば、この手まり歌は江戸時代や明治時代のわらべ歌全集には見えないことから推せば、比較的新しい近年の歌と考えられる。「船場」は今の熊本市の交通局付近の地名で、お城の近くに船場上、船場下の町名があり、船場側は現在の坪井川付近という。ただし、船場山はないので、おそらく、船場川付近の小高い藪地を指して言ったのかもしれない。」(4 巻上 54 頁)
- 7 「『船場』は現在も熊本市内に町名が残っており、また、船場川は藩政時代馬を洗ったことから洗馬川とも呼ばれた坪井川で、現在も熊本城を取り巻いて流れている。歌の舞台が熊本であることは間違いないことである。」(1 巻 25～26 頁)
- 8 「この歌の発生が熊本でないことは、「さ」の方言が熊本にないことと、「あんたがたどこさ」という問いかけに対し「肥後さ」と、肥後人同士なら「肥後」から説明する要のないことでわかる。だが、歌の舞台が「肥後の熊本」であることは、歌詞の通りである。」(23 巻上 80～81 頁 熊本宮崎のわらべ歌)

上述したように、日本わらべ歌全集では、「あんたがたどこさ」の舞台が熊本であることは共通したところであるが、その発祥については、5 つの巻が東京ないし東京地方とし、熊本と明示しているものはない。熊本でないかと推測できるのが、浅野健二氏に依拠した北海道のわらべ歌(1 巻)のみである。ただ、東京を発祥とする説も推論に過ぎず、その根拠を示す資料はいずれも示されていない。

一方、熊本ではないとする根拠として、熊本では「さ」という終助詞で終える話し言葉がないことと、熊本人同士の会話であれば、「あんたがたどこさ」と問い、「肥後さ」と返答すること自体がありえないことを根拠としている。

## 発祥地を巡る所説とその課題

### 1 川越説

「あんたがた何処さ 肥後さ 肥後何処さ 熊本さ」と歌い継がれてきたこの手まり歌は、一節には『問答歌』といわれ、幕末から明治期にかけて生まれました。九州熊本がその発祥地のように思われていましたが、実は関東の歌で、埼玉県川越市喜多院裏の『仙波山』あたりがそもそもの発祥地であることが地元川越市の郷土史研究家によって明らかにされています。幕末に薩長連合軍が討幕のため川越の仙波山に駐屯し、その付近の子どもたちが兵士に『あんたがたどこから来たのさ』『肥後から』『肥後って何処さ』『熊本のことさ』と問い、答えた(問答)ことから始まったと伝えられ、後に手毬唄として歌い遊ばれました<sup>9)</sup>としている。しかし、この説を裏付ける以下の点に課題が残る。

- ①「埼玉県川越市喜多院裏の『仙波山』あたりがそもそもの発祥地であることを、地元川越市の郷

土史研究家に依拠しているが、根拠となるが資料は不明である。

②肥後藩が薩長連合の一藩として出兵した歴史的証拠と川越の仙波山に駐屯した資料が不明である。

③肥後藩が仮に船場山に駐屯していたとして、駐屯している兵士に地元の子どもが話しかけたとする事実が不明である。

## 2 熊本説

①川越地方のわらべ唄にこんなものがある。「仙波山には狸がおってさ それを獵師が鉄砲で打ってさ 煮てさ 焼いてさ」とあり、「そして子どもたちはこの仙波山を喜多院のある仙波のことだと思っている。しかしこれは、この唄の冒頭に あんた方どこさ、肥後さ 肥後どこさ 熊本さ 熊本どこさ、船場さ 船場山には・・・」とあるとおり熊本城下の洗馬山の方が正しい。何でもそこには自然の湧水があって、藩中の者が馬を洗う場所だったと聞いている。もちろん、川越の子供たちが仙波だと考えたって別に差支えがあるわけではなし、あながち幼い者たちの夢をこわす必要はない<sup>6)</sup>」。

## 考察

### 発祥の時期と担い手

「あんたがたどこさ」の発祥の時期は、①戊辰戦争後に、川越藩の仙波山付近に駐屯した兵士と地元の子どもの問答をもとにしている。②この手まり歌は、江戸時代や明治時代のわらべ歌全集には見えないことから推せば、比較的新しい近年の作と思われる。③ゴム素材の技術が明治になり日本に輸入されたことで、地面から高く弾む手まりを「あんたがたどこさ」の旋律に合わせて楽しむことが出来た。中田によると「昭和22年の秋、進駐軍から子供たちへの贈り物として、ゴム毬 200万個が放出された。……。その時の学童調査では男の子の遊びの筆頭は野球、女の子では毬つきであった<sup>7)</sup>」。このようなことから、浅川が言うように、発祥の時期は、明治中期から大正の期間であると考えられる。

わらべ歌は、「子どもの遊びの中で自然発生的に生まれ伝えられているものや、遊びの中に取り入れられた既成曲の総称<sup>8)</sup>」とするのが一般的ではある。岩井は、わらべ歌は「子どもの生活の中に息づき、子ども自身の手で創造される歌であった<sup>9)</sup>」と述べている。しかし、これらの言説の中の「自然発生的に生まれ」や「子ども自身の手で創造される」とは、具体的にどのようなことなのか、岩井を含め、わらべ歌に関する既存の文献ではこの点への言及はない。大人が子どもの成長と音楽の実りを意図して作成した学校唱歌や童謡では作り手は明確であるのに対し、わらべ歌は、どこで誰がいつ作ったのかが不明である。とすれば、「作り人知らず、詠み人知らず、されど、歌い人（子ども）あり」となり、「自然発生的に生まれ」「子ども自身の手で創造された」ものでなく、子どもが生活の中で口ずさんでいた日本の伝統的な旋律を含む音の世界や子どもの遊び戯れる姿を見て、

後に大人が歌として創造したものがわらべ歌であると考えるのが自然である。

川越説で述べてある＜薩長連合軍が討幕のため川越の仙波山近くに駐屯した際に、肥後藩兵士と地元の子どもの間の会話が歌詞の原点である＞とすれば、歌詞が生まれたのは、明治以降ということになり、明治14年にドイツからゴム製法の技術とともにゴム製の毬が輸入され<sup>10)</sup>、「あんたがたどこさ」が手毬唄として採用された時期に符合する。江戸時代や明治時代にも毬つき遊びはあったのだが、「あんたがたどこさ」に合わせてあそぶ手毬遊びは、ゴムの手毬が使用されて以降であるから比較的新しい近年の歌と考えられる。



図1 江戸の手毬遊びと現代の手毬遊び

### 「あんたがたどこさ」の舞台と歌詞

|               |     |        |               |     |          |
|---------------|-----|--------|---------------|-----|----------|
| あんたがたどこさ      | どこさ | 肥後さ    | あんたがたどこさ      | どこさ | 肥後さ      |
| 肥後どこさ         |     | 熊本さ    | 肥後どこさ         |     | 熊本さ      |
| 熊本どこさ         |     | 船場さ    | 熊本どこさ         |     | 船場さ      |
| 船場山には         |     | 狸がおってさ | 船場川には         |     | えびさおってさ  |
| それを獵師が鉄砲で撃ってさ |     |        | それを漁師が        |     | あみさでとってさ |
| 煮てさ 焼いてさ 食ってさ |     |        | 煮てさ 焼いてさ 食ってさ |     |          |
| それを木の葉でちよいと隠せ |     |        | それを木の葉でちよいと隠せ |     |          |

ここに示した歌詞にみる、「どこさ」「肥後さ」「肥後どこさ」等の場所や地名についての格助詞「さ」は方向性や目的地を意味するのではなく、場所や地名を意味していることから、「あんたがたどこさ」

の舞台が熊本であることは明白であり、わらべ歌全集や「あんたがたどこさ」に関する先達の著述・資料ともに共通するところである。

また、熊本では「さ」という終助詞で終える話し言葉がないこと（わらべ歌全集 23 巻上、18 巻下、10 巻下、1 巻）と、熊本人同士の会話であれば、「あんたがたどこさ」と問い、「肥後さ」と返答すること自体がありえないこと（日本のわらべ歌全集 23 巻上 81 頁）を根拠として発祥地は熊本でないとする。しかし、わらべ歌の「あんたがたどこさ」の歌詞は、子どもの手毬遊びやその情景から大人が作詞・作曲したものであり、子どものリアルな会話ではないことから、完成した「あんたがたどこさ」の歌詞から発祥地を論じることは論理的に妥当ではない。仮に、〇〇地方の会話が原点であっても、その遊びの情景を〇〇地方でない大人が、わらべ歌へと昇華すれば、昇華された言葉は、〇〇地方の原点の言葉、用語と異なることは明らかである。

### 「あんたがたどこさ」の発祥地

発祥地を考察するに際し、前提条件を置く必要がある。それは、上述したように、わらべ歌は、「子どもの世界で自然発生的に生まれ」「子ども自身の手で創造された」のではなく、子どもらが生活の中で口ずさんでいた日本の伝統的な旋律を含む音の世界や子どもの遊び戯れる姿を見て、後に大人が歌として創造したと考えるのが自然である。従って、「あんたがたどこさ」の発祥地を決定するには、①その歌の舞台（歌詞で表現された地域）、②歌詞の言語表現（歌詞で推定される地域）を区別して論じるほうが妥当である。必要条件①、②が同一と確定できた場合には、＜この歌の発祥地は、〇〇である＞と確定できる。①と②が異なる場合は、＜その歌の舞台は〇〇であるが、△△の地方で作られたわらべ歌である＞と帰結できる。

「あんたがたどこさ」の発祥地については、川越、熊本、東京・東京地方に分かれている。「わらべ歌全集」の 5 つの巻が東京ないし東京地方とし、川越と明示したものはない。ただ、わらべ歌研究者や川越の民族研究者においては、川越を発祥地とするものもある。

第 2 章 2 節で述べたように、川越を発祥地とする論拠は 3 つ挙げられている。すなわち、①歌にある「せんばやま」は、「埼玉県川越市喜多院裏の『仙波山』あたりがそもそもの発祥地である。

②肥後藩が薩長連合の一藩として出兵し、「仙波山」あたりに駐屯した際に地元の子どもと肥後藩の兵士の会話が「あんたがたどこさ」の歌詞の原点である。

③肥後藩には歌詞にある「せんばやま」と名の付く山は存在しない。

以上 3 つの論拠のうち、『仙波山』が喜多院裏にあるのは事実であるが、『仙波山』の近くに肥後藩の兵士が駐屯した事実は、川越藩、肥後藩の当時の資料に見出すことは出来ない。

しかし、肥後藩の「せんばやま」に関連する記述が、熊本大学永青文庫研究所の資料に見出すことが出来る。「新馬借 B 調査区から明確な版築を確認し、土塁があつたのは確かである。…、加藤期にすでに土塁は築かれていたと考える。……。明治初期の古写真には、わずかながら推定できる

材料はある。甲元氏の論考にあったようにかなりの大きさがあり、船場山といわれる小山状の高まりがあったと推定される。・・・高さは民家の軒の高さを3 m程度とすれば、3～4 mはあったと推定でき、…、最下部の幅を10 m程度と推定できる」<sup>11)</sup>。江戸時代後期の細川公園図には、川に沿って土塁が多くあり、小高い山がある<sup>12)</sup>。また、太田氏の川越説が依拠した川越市の民族研究家も存命していなくて、裏付けになる資料も不明である。

これらの論点を整理すると、①その歌の舞台（歌詞で表現された地域）、②歌詞の言語表現（歌詞で推定される地域）の条件は一致しないことがわかる。従って、歌の発祥地は未定である。しかし、「あんたがたどこさ」の舞台は、熊本であることが確定できる。

次に、「あんたがたどこさ」がどの地域で作られたのであるかについて検討する。「あんたがたどこさ」に、11個の格助詞、終助詞「さ」が使用されて、熊本の言葉使いと異なることから、熊本と異なる言葉遣いをする地域で作られたのは明らかである。

熊本市にある「あんたがたどこさ顕彰会」の丹部恭平氏（故人）は明治43年生まれであるが、氏が昭和3年に横浜高商（現横浜国立大学）に進学した際に、横浜の地で「あんたがたどこさ」の歌を偶然耳にし、歌詞をよく見ると、氏の居住地である熊本の船場川地域が舞台であることに気づいた。同時に、それまでに船場川地域では「あんたがたどこさ」を聞いたことがなかったのに、どうして、横浜で歌われているのか驚いたと語っていたと言う<sup>13)</sup>。

## 結論と残された課題

これまでの考察の結果、「あんたがたどこさ」の発祥地は以下のように規定できる。

- 1 「あんたがたどこさ」の発祥地を論じる既存の研究等は、＜発祥地＞と＜舞台＞を混同して論じられ、さらには、完成形のわらべ歌は、子どもの遊び世界に共鳴した大人により、作り上げたという認識が欠けていた。
- 2 「あんたがたどこさ」の歌詞は、大人により作られた完成形であり、子ども達のリアルな会話ではない。従って、歌詞の中の格助詞、終助詞の「さ」を発祥地決定の要素とすることは妥当でない。むしろ、歌詞をデフォルトし、作曲した作詞家がいずれこの地域であるかを推察するのが妥当である。
- 3 熊本藩士が幕末に関東一帯に宿陣したことから、川越の「筑波山」近くがその一つとするのは妥当であり、宿陣した兵士と地域の子どもの遊興地での肥後藩士と御女中の会話に「あんたがたどこさ」の原点を求めることは妥当である。  
しかし、「あんたがたどこさ」の舞台が熊本であることには変わりがない。
- 4 「あんたがたどこさ」の舞台が熊本であることは明白であるが、それをもって熊本が発祥地であるとは言えない。

- 6 手毬遊びは江戸時代も子どもの遊びとしても存在していたが、「あんたがたどこさ」の旋律に合わせる遊び方は、ゴム製品の毬が製造された明治中期以降に始まった。
- 7 明治34年刊の「日本全国児童遊戯法」<sup>14)</sup>に毬つきを見ることは出来るが、「あんたがたどこさ」は記載されていない。また、明治時代のわらべ歌集にも「あんたがたどこさ」が見いだせない。昭和初期に横浜高等商業学校に入学した熊本の青年が横浜の地で「あんたがたどこさ」を耳にし、その歌詞が青年の故郷熊本市の船場あたりであること、その歌を熊本では聞いていなかったことに驚いたという。これらのことから、「あんたがたどこさ」は、大正に入ってから作られたと推察できる。
- 8 以上に記載した1から8の内容から、手まり歌「あんたがたどこさ」は、歌の舞台は熊本塩谷町（現在は新町2丁目）であり、作詞・作曲は関東地方であると結論できる。ただ、熊本の子どもの遊びがどういう経路で東京・東京地方に伝わったのかは、川越説の仙波山付近に駐屯していた肥後藩士と地元の子どものやり取りが原点であるということを含め、その経路を確定できる資料の発掘が課題として残る。

#### 注および引用文献

- 1) 岡村一郎 川越歴史小説 1～2頁 川越地方史研究会 誠美堂印刷所 1976
- 2) 町田嘉章、浅野健二編 わらべうた 日本の伝承童謡 岩波書店 1962
- 3) 山本清洋 石川ますみ お手玉遊びとわらべ歌「あんたがたどこさ」に関する一考察—運動的特性と音楽的特性からの分析— 豊岡短期大学 論集 第14巻 2109
- 4) 浅野健二、平井康三郎他監修 日本のわらべ歌全集全34巻 柳原書店 1981～1985。この全集の巻、掲載頁を以下の1から8までの引用文のあとの()内に示している。
- 5) 太田信一郎 童謡を訪ねて 174頁 1968 富士出版
- 6) 岡村一郎 川越歴史小説 1～2頁 川越市地方史研究会 誠美堂印刷所 1976
- 7) 中田幸平 江戸も子供遊び事典 23頁 八坂書房 2009
- 8) 福田アジオ他編 日本民俗大辞典 下 840頁 吉川弘文館 2000
- 9) 岩井正 増補子どもの歌の文化史—20世紀前半期の日本 第一書房 2003
- 10) 斎藤良輔編 一明治・大正・昭和—子どもの遊び年表 132頁 別冊太陽49所収 平凡社 1985
- 11) 熊本県文化財報告書 第303集 404頁 熊本城跡遺跡群 平成26年3月26日 熊本県教育委員会

- 12) 永青文庫細川絵図 出典 永青文庫細川絵図 時代は江戸後期
- 13) 丹部恭平氏（故人）の娘さんへの聞き取り調査（令和元年 10 月 4 日）による。
- 14) 太田才次郎編 瀬田貞二解説 東洋文庫 1986

